

## 信徒講座：宣教の使命に生きる⑧

### Ⅺ. 信徒と教職の宣教協力

1. **新約聖書に見る「教職と信徒」の関係**: 新約聖書中この二者の区別は明確でないが、自分の職業を捨てて巡回伝道に当たるグループと、運動を支援するグループに自然に二分されていた。同じ神の民であり、職務の違いはあるが、上下関係ではない。
2. **初代教会の指導層**: 初代教会の指導層は①使徒;②長老;③監督;④執事等であった。「分業と一致」は、人体における諸器官の譬えで説明される(ローマ 12:4,5)。賜物は「使徒、預言者、伝道者、牧師また教師」、「奉仕、勧め、分け与え、指導、慈善」、「知恵の言葉、知識の言葉、信仰、癒し、奇蹟、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力」等と、違いがあるが、これらが連携してキリストの体を建て上げる為に用いられる(エペソ 4:16)。
3. **教会史に見る職制**: カトリック教会の確立によって職制が固定化され、教職(司祭)と信徒との区別が明確になってしまった。プロテスタントが「万人祭司主義」(全ての信仰者は自分にとって祭司であり、他人の仲介なしに直接神に近づく事が出来るという考え方)を掲げたのは、カトリックの司祭中心主義への反動である。しかし、宗教改革を経た教会でも、未だに「アマの信徒・プロの教職」という区別意識が残っている。これは、教会本来のあり方ではない。
4. **私の母教会の例**: インマヌエル船橋教会では、牧師は伝道と説教に専念し、CS や伝道一般の具体的運営については信徒が主体となって進め、牧師は大体それを承認し応援するという形で宣教が行われていた。教職・信徒の宣教協力の一つのモデルであったように思う。
5. **協労の為の段階**: 教職・信徒が協労する為に四つの段階での試みを期待したい:①ヴィジョンの共有:②戦略作りに共同参画:③実際的なチーム作り:④評価の仕組み、である。

### Ⅻ. 地域における宣教協力

1. **地域教会の大切さ**: 教会の基礎は地域教会である。しかし地域教会だけが大切という「マイ・チャーチイズム」も警戒すべきである。地域教会の自立性と尊厳を重んじつつ、健全な意味における「協会的交わり」と活動を大切にしたい。
2. **地域に根差した教会**: 「教会は地域社会から自己を隔離するのではなく、逆にその奥深くまで根を張っていく様にと召されている。教会は地域社会に遣わされているのであるから、傍観者としてではなく、具体的な関わりの中にこれを生きる。「日本の教会は地域を伝道の場として捉えてきたがそれ以上の関わりを教会の積極的な使命として捉えてこなかったのではないだろうか。東日本大震災の出来事は、教会に地域社会との関係性を見直す様にと迫っている」(篠原基章「宣教の神学から考える神学教育」:福音主義神学第 50 号, 2019 年、13 頁)
3. **中目黒教会における小さな実験**: インマヌエルの中央的教会は、丸の内から広尾、そして中目黒にと移転したが、その際目標として「地域重視」を加味した「ミッション・ステートメント」を採用した。「中目黒の地域社会に対して、物理的にも心理的にも開かれた教会となる事を目指す。地域社会の様々なニーズに対して積極的に応え、より良い地域社会の形成を目指す」。会堂の開放性、近隣社会活動への参画、等を取り入れた。
4. **地域教会同士の協力**: 日本の諸教会が地域ごとの牧師会、教会同士の協力伝道、地域の行事に共同参加、等の具体的方法で、同じ地域に在る諸教会が協力する事を願っている。